

# 連携教育に関する研究

## 高知大学と県立高等学校の連携のあり方について

高知県立高知丸の内高等学校 教諭 安藤千速

### 1 はじめに

高知丸の内高校普通科は、平成17年度の入学生から高知県で初の全日制単位制となった。新しい高知丸の内高校は、このシステムの変更を生かした3つの柱、「科目選択」「希望担任制」「高大連携」で生徒の自主性や学習の主体者としての意識を育てることを大きな特徴としている。

「科目選択」については、学習する科目を自分で選択するためには、将来に対するビジョンが要求され、どの科目を選択するにしても生徒は受身の姿勢でいるわけにはいかない。自分のために自分が選択した科目を学習するのだから、自動的に主体的な姿勢を強いることになる。わかりやすい項目といえよう。

「希望担任制」は、公示されたポスターに書かれている先生たちの一言が、生徒に今更ながら何を要求されているかを再確認させるし、自分が何を求めて担任を選択したのかは科目選択同様に主体性を要求することになる。

上の2つに対して、「高大連携」はわかりにくい。わかりにくさの一因は、連携により大学に行くこと自体は生徒になんら主体性を要求しないからで、もっと大きな原因は、高大連携の方法が不定形で漠然としており、人によりイメージすることに差異があることである。

### 2 研究目的

わかりにくい「高大連携」の分野で、身近にある高知大学という資産を活用して、どうやって生徒たちに実効性のあるプランを作るのか。高知丸の内高校の生徒たちに留まらず、将来的に本県高校生たちに何ができるのかを模索する。

### 3 研究内容

#### (1) 高大連携に対する先入観と疑問

高大連携は平成11年の中央教育審議会による文部科学省への答申のなかで、高等学校と大学の接続の改善が要求されていることを背景に、近年全国的な課題となっている。各県でさまざまな取り組みが行われているものの、それぞれの事情の違いもあり、現段階ではこのことに対する理解や解釈もまちまちであるといつてよい。

さて、私が勤務する高知丸の内高等学校は、平成17年度からの制度の変更の機会をとらえ、単に新しいシステムを導入するだけでなく、学校自体を大きく改革し創立200周年を迎えることができるようにすることを目標にして改編の作業に着手した。学校自体を大きく改革する柱として3つ挙げたうちのひとつが、今回の高大連携である。

正直なところ、当初は単位制になったことにより履修する授業に自由度ができたことを生かして、高校生を高知大学のいずれかの講座に参加させてもらうように算段することが私の任務であると感じていた。どの講座にならば参加することができるのか、どの講座にならば参加することの効果が大きいのかを物色してこようというのが当初の志である。まずは参加することの効果が大きそうな講座を探し、それからその講座に参加させてもらえるように依頼していくつもりであった。

多くの人が同様に疑問に持つであろう、高校生が大学の講義に参加することにどんな意義があるのかも、この時点ではぼんやりと懐疑的なままである。

## (2) 自律創造学習を通じての展開

4月から、高知大の空気を吸いながら、大学教育創造センターが全学部共通の教養科目として行っている自律創造学習にコーチングスタッフの一人として参加するようになった。自律創造学習は高知大学が大学教育を変えていくための提案として行っている、いわば目玉のひとつともいえる講座である。

この講座は、学生が自分たちで解決すべき課題を設定し、3名程度のグループで協力し合って、実際に課題解決していくという内容である。活動の主体が学生の側に置かれているので、教員は特に何を教えるわけではない。従来の大学教育に特徴的な、いわゆる講義というのとはずいぶん性質が異なる。課題解決型学習（Problem Based Learning）と呼ばれている学習方法である。

教育センターに提出してきた月例報告書を読み返してみると、その月にどんなことを考えていたのかがたどれて面白い。読み返すと春の段階で早々に、大学で行われている講義に高校生をそのまま参加させることに対しては、その必要がないとしている。大学の講義の雰囲気を楽しむことにより、高校生に与えることができるであろう効果のために、年間を通じて大学の講義に参加させる必要はなく、すでに実施されているスポット的な参加で十分である。これではこれからの高大連携とはいえない。また、大学入試を経ていない高校生に大学の講義を聞かせたところで、絶対的な知識量の差によって満足な効果を挙げることはないであろう。

課題解決型学習の手法を用いた自律創造学習は、絶対的な知識量の差を気にすることなく高校生にも大学生にも効果的な内容である。それは上述したように、この講座は受講者の主体的な行動がもとになって成立しているからである。当初から高知大学と高知丸の内高等学校の間では、この講座を高大連携の手段のひとつとしていこうとする方向性は話し合われていた。自律創造学習に高校生を参加させることによって得られる効果には、受講者の主体的・積極的な姿勢以外に、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、短時間でのプレゼンテーションのための論理性の獲得、といった内容が挙げられる。



写真 1



写真 2

写真1は、将来教員になりたいと考えているチームの授業での発表風景である。このチームは自然にどうやって興味を持ってもらうかというテーマを、自分たちで設定していた。

学生たちは授業での経過発表に対して、ほかの学生や教員から出た質問などを参考にし、次回までに課題解決のプロセスを実行してくる。

このチームの話し合いは、アルバイトなど互いの空き時間の関係から深夜に及び、徹夜明けの発表に近いときもあった。長時間の話し合いにもかかわらず、学生たちはこの時間を充実した時間であると感じている。

自律創造学習のチームでは、当初はお互いの遠慮などから表面的な話し合いが続くが、一定の時期を経ると本音を言い合わない学習活動を継続していく手応えがなくなってくる。この時期に本音を出し合えて、チームとしての軌道を確認することができる、以降の結束は強くなり自律的にどんどん発展していくことができるようになる。しかし、表面的な関係で続けることが困難になったときに、本音を出し合う壁を越えることができなければ、学生たちはたがいに遠い距離を保ったまま以降の時間を消化するようになり、自律的に発展する可能性は潰れる。授業中に与えられるものが少ないだけに、そうなる単位取得のためだけに過ごす時間となり充実度は激減する。

教員が細かく指導して道筋を立てることをせずに、学生たちが戸惑い、悩みながら、次の解決プロセスを探していくことが大切だけに、高校の教員があまり慣れていない教えない我慢がコーチングスタッフには必要である。

写真2は、自律創造学習の最終発表会である。この日は審査員を招いて、チームの発表を評価してもらった。この日一日の発表に対する評価は、過程を評価することができないので表面的なものにならざるを得ない。発表としていかにまとまっているかが基準にならざるを得ないからである。しかし、上述のように自律創造学習が学生の主体的・積極的姿勢により自律的に行われたかどうか、本来のこの講座の評価基準である。

ほかに、前期の自律創造学習に参加して感じた課題として、7月の月例報告書に課題設定の難しさをあげている。この授業では自分たちが設定した課題を解決していくのであるから、最初の課題もチームによりまちまちである。設定された課題があまりにも周辺の取るに足りないと思われることだと、授業の発展性を阻害すると感じていた。しかし、後期の自律創造学習がまもなく終わろうとする頃に、最初の課題をどう設定するかよりも、後の自律性により発展性が変化することに気付いた。後期では、大きなアンパンマンを作ろうと課題設定をしたチームが、それだけでは面白くないので作った大きなアンパンマンを保育園に持ち込もうと考え出したからである。彼らは最初の安易な課題設定に飽き足りず、これで何ができるのかということを考えだしたはずである。最初に安易な課題しか設定してなくても、本音を出し合ってメンバーが有機的に結びついたチームなら、あとから発展していく可能性を持っている。その点、意外なことに初めから仲がよいものがメンバーになっているチームは、本音を出し合う深刻さを経ることがないので、発展的な自律性を持つことはない。

自律創造学習は不完全燃焼のまま日程を終える学生も少なくない講座である。しかし、平穩無事な学生生活では出くわすことが少ない深刻な場面に遭遇することができ、深夜にわたる話し合いを充実した時間であると感じることができるようになれば、主体性・自主性を獲得することができ飛躍的な成長が期待できる講座である。

### (3) 土佐の海的环境学 - 柏島から考える - を通じての展開

6月の月例報告書に、「何のために勉強するのがよくわからない」という高校生がしばしば行き当たる疑問に対して、連携科目を使って現象の面白さを伝えることを目標にしたいという記述が出てくる。入手したシラバスから効果的と思われる講座を探していくうちに、自律創造学習によって得られる効果以外に、比較的反応が速かった農学部や理学部との高大連携科目を考えている。

何のために勉強するのかという生徒の疑問に対して、入試に出るからという回答をする高校教員は少なくないであろう。しかし、この回答が本当は質問に答えておらず、上手に粉飾されたものであることは答えた先生もわかっているし、答えてもらった生徒も気が付いている。勉強は次に予定されている選考を突破するためにしているのではない。そして、この便利そうな回答により学習する動機を維持したり、学習者としての自分を奮い立たせることができる生徒は、全体の何割かに過ぎない。

ほぼ全員が大学への進学を当初から目標にしている高校では、入試のために勉強するという動機も成り立とうが、高知丸の内高等学校では成立しないであろうし、そうであれば高知県全体にも寄与しない。人数的なボリュームが大きい層に対して効果的な学習動機となる方法として、現象の面白さを

あげているのは、シラバスに「土佐の海的环境学 - 柏島から考える -」を見つけたからである。

「土佐の海的环境学」は5日間の夏期集中講座である。うち2日間は朝倉キャンパスで座学、3日間は大月町柏島へ行き現地での実習となる。この講座の魅力は課題が実在していることである。そして、柏島の海を課題に、生態を中心とした生物学的切り口であったり、経済や法律といった社会的切り口といったように、分析の手法が統一されていなく、学生により多様であっていいことである。現存する課題なので当然正解はなく、思考が論理的であれば自由な着眼と発想によりこれに取り組むことができる。9月上旬に行われたこの講座に参加してきた。



写真3



写真4

写真3は柏島でシュノーケリングにより海生生物を見に行く学生である。桟橋より舟で出発し、水深3～5mほどのところにすむサンゴを観察しに行く。現地で課題になっていることのもとである海の生物について実際に見てくるところにこの講座の大きな特徴がある。

写真4は地元の人たちによるパネルディスカッションの光景である。立場の異なる地元の人たちが相互に意見を交わすのを見聞きし、現地に実在する課題について考える。同じやりとりを見聞きしても、学生の感受性により得る情報は異なる。実際のフィールドから有用な情報を回収し、無用な情報を棄却することもこの講座では求められている。

土佐の海的环境学は、実際のフィールドでの活動から情報を収集し、収集した情報を分析し、分析に基づいて柔軟に発想し、論理的に組み立てるといふ、知識量ではなく思考力に基づく学力を養うという目的にうまく合致している。高度な要求ではあるが、何に共感して何には共感しないかという感受性によって、論理が元来持っているパラドックスに常に潜む嘘にも気付くことができるかもしれない。住民と話をする時間をもっと多くとったり、路地を歩き回って生活の匂いをかぐといった五感を活用する時間をもっと長くするとさらに効果が見込まれる。

土佐の海的环境学は、大学の持っている講座の内容に対する柔軟さが存分に生きている講座といえる。私が同行したこのときも、前日に台風が通過したばかりで水道が止まったり海が汚れたり、現地で柔軟な対応をとる必要があった。もっとも柔軟に対応することができることこそが、大学が学生に要求している学力であるのだから、そのことによって問題は全く生じてはいない。指示を待ってそのとおりに行動する学生よりも、状況を判断して自分で行動を選択することができる力を育てたいとする大学が日頃から言っている内容が、台風のおかげでここで試されていたように思う。

前期の自律創造学習でもそうであったが、実際のフィールドに出ている土佐の海的环境学を通じて、この時期の私は、さらに異校種間のスムーズな接続の必然性を感じなくなってくる。10月の月例報告書にそのことが記載されている。学生はむしろ異校種であることに戸惑い、自分の現状に深刻さを感じる必要がある。深刻さこそが試行錯誤の入り口であり、試行錯誤の迷路のなかで論理的思考や情報を取捨選択する感受性が養われる。思考力とは迷路のなかで養われるものである。

#### (4) 高大連携フォーラムを通じての展開

12月9日に京都でおこなわれた第3回高大連携フォーラムに参加してきた。京都では大学間の相互単位認定などで先進的な取り組みが行われている。京都での分科会で、キャリア教育について考える機会を得た。なかでも、京都パープルサンガの細川浩三氏によるJリーグ100年構想の話が圧倒的に心に残った。

Jリーグでは、2050年に開かれるワールドカップでの日本チーム優勝を目標に、ユースチームの育成をそれぞれのチームの責任としている。京都パープルサンガだけでなく、どのチームもユースチームを持ち、次世代のJリーガーを育てている。次々世代についても同様である。そこでは将来の選手たる若い子供たちに、日本サッカー界全体の夢として2050年に優勝しようと話しているという。2050年という、今のユースの選手たちがプレーヤーとして世界を相手に経験をつみ、その経験を指導者として次の世代に受け渡したころよりもさらに後である。つまりJリーグでは、はじめからサッカーをしようとする子供たちに、自分がピッチに立つことだけではなく、指導者として経験と夢というバトンを次世代に渡すことまでも目標にさせている。

高校や大学といった専門のどの教育機関よりも、長いスパンで熱いキャリア教育が行われているとあってよい。

明治の空気というようなものがあつたと思う。それは司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読むとどうしても感じる。明治維新以降、列強に追いつけ追い越せを合言葉にしていた日本にとって、若者は自分が頑張ることが国家や全体の繁栄につながっていることを感じていたであろう。戦後の昭和においても同様の空気があつたと思う。しゃにむに頑張ることが全体の復興につながっている手応えを感じていたであろう。この時代は、社会全体の空気が若者にキャリア教育を行っていた。

平成の今、生活を取り巻く周辺の環境は一定の水準まで達成されたようである。若者たちにとって、自分が頑張ることが社会全体の繁栄につながるという実感は希薄になってきた。多様な価値が認められやすくなった代わりに、自分で将来を選択する責任が増えた。やりたいことがわからないからという理由で定職につかないニート・フリーター(不登校も含んでよい)の増加は、現象として今の時代を象徴している。社会の空気全体がキャリア教育をしなくなった今日、若者たちにとっては考えなくてはいけないことが増えたのである。

一昔前、明治の気運が残っていた時代にも、人々はやりたいことをしていたわけではなかった。ぶら下がったことをひたむきにしていただけである。キャリア教育はやりたいことを探す教育ではないと思う。何にぶら下がっても、ひたむきにやる態度を身につけることではないだろうか。パープルサンガが言うように、サッカーをするのなら指導者として後進に夢を託すところまでして欲しい。

#### 4 まとめ

上述の3つの展開を、高校にとって利用することができる高知大学が持つ資産は何かというフィルターを通して収束させると、ひとつは大学の講座の柔軟性であり、もうひとつは学生の存在そのものである。もちろん学問の専門性の高さではない。

そのことから、高知丸の内高校が高知大学という近所にある資産を生かして行う高大連携は、次の2つのことを根幹にすえることにする。

##### (1) 大学の柔軟な講座によるフィールドワークの機会を利用する

いくつもある講座のうち、高校では行なうことができないようなフィールドワークにつながるものに参加する機会をつくる。それにより、教室で獲得した知識をフィールドで活用するリテラシー能力を身につけることを目的とする。知識は丸暗記するだけでなく、それを活用することができるときに喜びとなる。フィールドワークによる実際の体験と知識が有機的に結びつくことにより、もっと学習したいと感じる本質的な学習動機にもつながる。教室に帰って獲得してきた知識がさらに次の機会の体

験に結びつくようになると、体験と基礎となる学習活動は学習動機によりスパイラル状に再生産される。両者の再生産がおこなわれるようになってくると、入試対策としての勉強と比べて本来的な質の違いが出るであろう。「入試に出るから勉強する」の裏は、「入試に出ないなら勉強しない」ということになる。命題に対する裏が必ずしも真でないように、本来的な学習活動は学習そのものが楽しいはずなのである。

年度の半ばに、高知大学で学習する機会があること自体は、はじめから四年制大学に進学するつもりではない生徒にとっては、さほどの魅力ではないことに気が付いた。当たり前ではあるが、内容が大切なのである。図1は再生産される関係のイメージを表している。逆説的であるが、このスパイラル状の関係は結果的に大学に対する興味を引き出し、入学時には四年制大学への進学を考えていなかった生徒が、高校卒業後もさらに勉強することを選択することが増えるであろう。

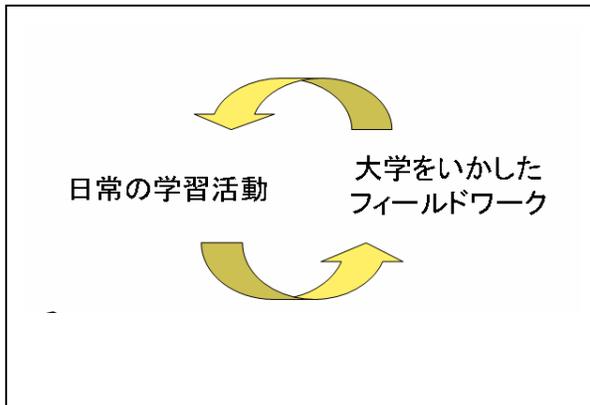


図1



写真5

学習動機によるスパイラル状の関係を高大連携の手法として考えるのであれば、高知大との連携講座の履修は高校3年次ではなく、2年次の履修が望ましい。それ以降の実際に獲得された手法が実行される時間が長くなるからである。1年次には必修科目がひしめいており、これらを履修することは困難である。

具体的に、平成18年度に次の6つの講座を単位制普通科の生徒のために設置する。

- 「地震と活断層」(前期、木曜日午後)、 「防災科学」(後期、木曜日午後)、
- 「学びを創る」(前期、金曜日午後) 「自律創造学習」(後期、金曜日午後)、
- 「土佐の海の環境学」(夏期集中)、 「アグリ・ベーシック」(土日に開講、年間16日)

写真5は防災科学を担当する理学部の岡村眞先生による、室戸岬で行われたフィールドワークの1コマである。この6つの講座のうち、「地震と活断層」、「防災科学」、「土佐の海の環境学」、「アグリ・ベーシック」はフィールドでの活動につながっており、「自律創造学習」はPBL、「学びを創る」はいずれにもつながるイントロダクションとして位置づけられる。

課題解決型学習は実在を伴わないフィールドワークと考えている。実在を伴わないので、空論のまま終わることもありうるが、前章で記載したように実在に発展する可能性も低くない。

## (2) 大学生によるキャリア教育を高校生に実施する

キャリア教育は夢と経験を次世代に語ることであり、その連鎖が社会の空気を作り出して行く。高校生に夢と経験を語るには、少しだけ年齢差がある我々よりも、ずっと経験知が近い大学生のほうが適している。複数の大学生に夢を語ってもらうことにより、「将来は自分もあの人のようにになりたい」という漠然とした期待感が高校生に宿ってくれればいいと思う。大学生に語ってもらう夢には、しがみついてきた経験を含めておきたい。まだ少しばかりの時間ではあるが、何を一生懸命やってきて、どんなことを一生懸命にやっていきたいのかを語って欲しい。大学生にとっても語るほどの夢を持つ

ている学生は少ないので、高校生に語るためには自分のありようから考え直す必要が出てくるであろう。双方にとって効果的と思われる。大学生が語ってくれた夢は、近未来の大学生になって語る自分を高校生がイメージするためにも有効である。

将来に対する漠然とした期待感は、学習の主体者としての生徒の姿勢を変えるであろう。実際にどういった将来を選択するかはともかく、自分の将来に期待感を持っているということは大きな生きる力につながる。

とりあえず、次年度に自分が担任をしてLHに招いて喋ってもらおうつもりである。

現在のところ積み残している課題が3つある。その一つは、高校が利用可能で私が具体的なプランとして触れていない高知大の資産がもう一つあることである。それは大学の先生たちの存在である。大学の先生たちと高校の先生たちが双方向的に本音で話し合う場を作ることが高大連携としてできると感じているが、具体的なプランになっていない。次年度以降になるであろうが、このスタイルの高大連携も実現させていきたい。

二つめは19年度以降の連携の内容である。これについては、根幹を成す考え方が成立してさえいれば、容易に発展すると考えている。大学の先生たちは発展の可能性を持つ話に意欲的である。

そして三つ目、どのような理想的な理論も実行されてはじめて価値を持つ。どんな立派なことを思いついても、行わなければ限りなく無に等しい。積み残した三つ目の課題は、未だ実践していないことである。この報告書は中間発表である。次年度は高知丸の内高等学校に戻り、今年考えたことを自分が実践する。なるだけ最少律に遠慮することなく、理想に近い形で具現化したい。

この報告書を書いている2月に、中央教育審議会教育課程部会の審議経過報告が出た。そこには、体験を重視しながら、子供たちの生活や学習の基盤を培うことが必要という方向性が出されている。私が考えている高大連携を後押ししてくれているように思えて嬉しい。

研究生生活が終わろうとする3月に、もうひとつ大きな収穫があることに気が付いた。それは高校教員である私に少し染み付いた大学の空気である。その空気は私自身が4月当初に当惑した企業文化の違いの事である。今年の経験を胸にこっそりとしまったりせずに、生かそうとすればするほど、私が持ち帰る空気が高校現場では貴重なアンチテーゼになるはずである。

最後に、この研究は単位制高校ならではの運用を前提にしているが、すべての高校に十分一般化しうる考え方と思っている。本研究が高知県のみならず、あらゆる場面で活用される機会があれば、私の一年間はより意義が大きくなる。

#### 参考文献

- ・ 小林康夫/船曳建夫 『新・知の技法』 東京大学出版会 1998年
- ・ 小林章夫 『イギリスの学校から学ぶ』 NTT出版 2005年
- ・ 久富善之/田中孝彦 『希望をつむぐ学力』 明石書店 2005年
- ・ 庄井良信/中嶋 博 『フィンランドに学ぶ教育と学力』 明石書店 2005年
- ・ 秋田喜代美/石井順治 『言葉の教育と学力』 明石書店 2006年
- ・ 佐藤洋作/平塚眞樹 『ニート・フリーターと学力』 明石書店 2005年
- ・ 日本経済新聞社編 『働くということ』 日本経済新聞社 2004年
- ・ 三浦 展 『仕事をしなければ、自分は見つからない。』 晶文社 2005年
- ・ ペドレー著 岸本弘・岸本紀子訳 『コンプリヘンシブ・スクール』 明治図書 1979年